

「戦前日本のマルクス主義」 英文草稿

丸山 眞男

解 説 (湯浅成大)	113頁
文献解題 (川口雄一)	111頁
戦前日本のマルクス主義 1963年3月5日 (湯浅成大訳)	110頁

解 説

湯浅 成大

本稿は、丸山眞男が1963年3月5日、前年の10月から滞在していたイギリスで行った講演の草稿の翻訳である。

この草稿は解題にも書かれているように、発表原稿部分とページの間に挿入されている他筆と思われる資料部分および自筆のメモ部分からなっている。

本稿は主として発表原稿部分の翻訳に、訳者の判断で適宜資料部分の要約やメモ部分の翻訳を加え、訳者が読者の読みやすさを考えて小見出しを付けたものである。丸山眞男文庫デジタルアーカイブ上の画像では、資料全61頁のうち、1頁から50頁を対象としている。

この草稿は大きく分けて6つの部分に分けられる。(1)はじめに、(2)戦前日本のマルクス主義者、(3)戦前日本におけるマルクス主義書籍の出版、(4)転向問題、(5)メモ部分、(6)戦後日本の左翼運動である。そのうち(2)(3)(4)、が発表原稿のほとんどを占め、(6)の戦後に關する部分のごくわずかである。

主要部分である戦前日本のマルクス主義についてだが、「戦前日本のマルクス主義者」では、主としてマルクス主義にひかれた若者（旧制高校生・大学生だけでなく、非知識層ともいえる若者も含む）の特徴が書かれている。また「戦前日本におけるマルクス主義書籍の出版」の部分では、いかに日本においてマルクス主義関連の翻訳出版が盛んであったかが強調されている。四番目の「転向問題」では、転向の動機の日本の特殊性やそもそも日本のマルクス主義者がいかに日本社会の伝統から遊離した存在であったかということが述べられている。

丸山はこの講演の「はじめに」の部分で、これまで日本においてマルクス主義を論じるということは、社会主義共産主義運動について語ることとほぼイコールになってしまっ

おり、哲学としてのマルクス主義の内容であるとか、マルクス主義の政治学・経済学・歴史学・文学・美学・芸術学等への影響といったものはほとんど論じられていないという問題を指摘している。けれどもこの講演草稿では日本のマルクス主義研究であるとか学術上の論争などについては全く触れられていない。かといって、日本の左翼運動や活動家について論じているわけでもなく、「自らの観察にもとづく」と発表原稿内で言っているように、主として学者や学生とマルクス主義のかかわりを中心に話を進めている。丸山が講演の中で触れているエピソードは、いささか業界の内輪話といえないこともないのだが、もちろん丸山は楽屋落ちのネタ話がしたかったわけではない。丸山にとって、学者のかかわりという観点から日本のマルクス主義を論じることが、すなわち日本の知識人をめぐる問題について論じることを意味するので、戦前日本の知的状況をよりの確に説明するために、あえて日本におけるマルクス主義研究の成果など哲学としてのマルクス主義にかかわる問題ではなく、マルクス主義を取り巻く事情について語ったのだと思われる。

そして、この講演で語られた問題は、のちに活字化された丸山の「日本の知識人（座談）」（加藤周一、石田雄との座談、1967年、東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』第3巻、岩波書店、2015年所収）、「近代日本の知識人」（1977年、『丸山眞男集』第10巻、岩波書店、1996年）などにおいても見ることができる。

例えば、『マルクス・エンゲルス全集』の出版に象徴される、戦前日本のマルクス主義普及における「勉強的」側面の指摘（「近代日本の知識人」249頁）、戦前日本のマルクス主義理解は世界的水準にあるのに『共産党宣言』一つ出版するのに難儀するようなアンバランスさへの言及（「日本の知識人（座談）」82頁）、転向がマルクス主義から別のイデオロギーへの回心ではなく日本的伝統への単なる帰依であるという指摘（「近代日本の知識人」252頁）などがあげられる。そして戦前日本においては、それまでタコソボ化していた各専門分野をマルクス主義が初めて相互連関的に結び付け、社会科学イコールマルクス主義という地位を獲得し、それが知識人に共通の基盤と役割を自覚させたという点（「近代日本の知識人」247、249-250頁）についても、この講演の中で重要な問題として扱われている。さらに、メモ部分に書かれている戦後の特徴、例えばアメリカ社会学の影響、非マルクス主義学者の登場などは、「日本の知識人（座談）」においても論じられている。

このことは、振り返ってみれば、「日本の知識人（座談）」「近代日本の知識人」で論じられている問題は、すでにこの講演が行われた時期から、丸山の問題意識としてすでに形を成していたことがうかがえる。

さて、実はこの草稿には「結論」に相当する部分がない。この講演の結論はどのようなものであったのか、安易に推測することは避けたいが、あえて想像すれば、ヨーロッパ的な意味での知識人層が存在せず、また学問分野横断的な総合的社会科学が確立されていなかった戦前日本において、遅れて輸入されたマルクス主義が一躍日本の社会科学の本流の

地位を得てしまったことが、そしてマルクス主義の持つ普遍性や論理一貫性が日本的伝統とかけ離れたものであったことが、その後の日本の知識人の歴史をいかに規定してしまったのか、という方向でまとめられたのではないかと思われる。あるいは、そこまで明確には話をしなかったかもしれない。しかし、そのような問題意識の萌芽はこの草稿に含まれるエピソードからも見て取れるということを改めて最後に指摘しておきたい。

文献解題

川口 雄一

底本は、丸山文庫所蔵の草稿類資料「Marxism in pre-war and post-war Japan」(資料番号365)。「Marxism in Pre-War Japan」と自書された封筒に以下の資料が収められていた。

- (1) 英文草稿。無地用紙(A4変形)43枚。1枚目右上に丸山自筆で、「5. March, 1963」と記されている。R・ストーリーによる書入れがある。なおそのうち1枚は紙背がI・バーリン宛書簡の書き損じと推定。
- (2) 他者作成の資料。薄紙(B5判)2枚。内訳は、①唐沢富太郎『学生の歴史』(創文社、1955年、登録番号0186392)、岡田恒輔『思想左傾の原因及び其の経路』(『国民精神文化研究』第16冊、国民精神文化研究所、1935年)を元にした左傾学生に関する資料。②司法省刑事局『思想研究資料』第85号(1941年5月)を元にした治安維持法による検挙者に関する資料。両資料とも作成者は不明、また両資料に丸山による書込みがある。また、②のコピー計3枚(A4判・2枚、B5判・1枚)がある。
- (3) 丸山ゆかり夫人筆記の口述原稿。岩波書店原稿用紙(200字詰・B5判)9枚。内容は「近代日本の思想と文学——一つのケース・スタディとして」(初出1959年、『丸山眞男集』第8巻所収)と深く関連するが、対象とされている学者(大河内一男や羽仁五郎)など、公表された論文と重複するものではない。
- (4) 英文と日本語文が入り混じった草稿・メモ。ルーズリーフ(三穴・A4変形)2枚。ブルーブラックとブルーのインクを使用。

本資料は、以上の資料がつぎのような順序で組み合わせられている。まず、上記(1)があり、その途中、(2)の①が挿入されている。つぎに、(2)の②およびそのコピー、(3)、(4)とつづく。このような複雑な構成をもつ本資料のなかでも、本稿は中心的な内容をもつ(1)を翻訳したものである。

なお、本資料全体の内容および配列は、東京女子大学丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ(<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives>)で確認できる。

凡 例

- ・ 訳文中の [] で括った部分は訳者が付した注である。本稿で割愛した資料のうち、訳出した英文草稿と関連する箇所は、丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブで表示される画像のページ番号を [] の中で示した。
- ・ 本稿の見出しは、訳者が付した。英文草稿では話の文脈が不明確な箇所があるが、極力、話のまとまりや展開を考慮したためである。
- ・ 丸山が付した記号のうち、訳文では不要と考えたものは削った。
- ・ 下線による強調は丸山が英文草稿に付したものである。
- ・ 必要に応じて訳のあとに原語を付した。
- ・ 判読不可能な箇所は□□とした。

戦前日本のマルクス主義 1963年3月5日

はじめに

ご挨拶

中国の有名な古いことわざに「羊頭狗肉」というものがあります。実は、私はいま、このことわざが、これから私が行う「戦前・戦後日本のマルクス主義」と題する講演を評するために作られたのではないかと、内心恐れています。というのは、私の能力の限界はさておき、日本におけるマルクス主義イデオロギーやその運動の歴史的発展とについて、たった1時間で概略し、かつ分析するのはほとんど不可能だからです。けれども、おおざっぱではありますが、私はそれを何とかまとめてみようと思っています。

何度も講演のプランを改めた末、主として私の個人的な観察をもとに、そしてたまたま私の手元にあったいくつかの資料を使いながら、日本のいわゆる「思想問題」について、私の大まかな見解を述べさせていただくことに決めました。もちろん私の観察は非常に限られた範囲のものであり、またこれからお話することは、この中の幾人かの皆さん、特に戦前の日本に住んだことのおありの方にとっては、すでに周知の事柄が含まれていることとおもわれます。また、私の原稿は周到に準備されたものとはいいたくないので、ある問題から他の問題へと議論が突然飛んでしまうこともあるかと思いますが、その点をご容赦願いたいと思います。

マルクス主義思想と共産主義（社会主義）運動

さて、みなさんに最初に注意していただきたいことは、私はこの報告のタイトルを「日本における共産主義」あるいは「左翼運動」ではなくて、あえて意図的に「日本における

マルクス主義』といたしましたが、これはある意味で誤解を招く可能性があります。というのは、日本の共産主義（社会主義もこれに加えていいと思いますが）について、日本語ばかりでなく西洋の言語でも、多くの本や論文が書かれてきましたが、それらはプロレタリア政党や労働組合の活動に関するものでした。ところが驚くべきことに、以下のような諸問題、すなわち日本の哲学的思考の長い歴史において、哲学としてのマルクス主義がどのような地位を与えられているか、あるいは日本の政治学、経済学、歴史学において、マルクス主義がいかなる学問的貢献をしたか（もちろん悪影響も含めて）、さらに、美学的基準について長らく誇るべき伝統を持つ日本において、マルクス主義的世界観が、文芸や芸術批評の分野に対してどのような特異な衝撃を与えたか、これらの問題についてほとんど語られていないからです。

これらの問題は、マルクス主義者・非マルクス主義者等しく関心を持つはずの問題であり、これらの問題の含意するところを大まかであれ理解することなくして、近代日本の文化的あるいは文化的知的風土についての、また政治的あるいは経済的な風土についての鳥瞰図を得ることはできないのではないかと私は考えます。

けれども、この問題について私はこれ以上深入りすることは控えます。ただ、私は日本のマルクス主義の問題を、社会主義あるいは共産主義運動と、もちろん両者はいろんな形で互いに結びついているのですが、区別して扱う必要を皆さんにお示ししたかっただけなのです。

ではここから、私は日本のマルクス主義のある種の特徴と、他国のそれとを比較するのに役立つ、いくつかの社会現象に関する事例を挙げていくことにしたいと思います。

日本のマルクス主義について論じる意味

常識の線でやればよいというイギリス的なやり方は、国が経済や社会の構造を大規模に構築、あるいは再構築する必要性に直面していない限りにおいては、まったく問題ありません。けれども、もし経済社会構造の構築（再構築）が決定的に重要な争点になるとすれば、人々は自然と、宗教的確信とは言わないまでも、何らかのドクトリンを求める傾向があると思います。というのは、そのようなドクトリンは、現在の世界における人々の立ち位置を定め、どこからどこに向かうべきかの方向性を知らせてくれる（あるいは知らせてくれると思込ませる）座標軸、あるいは方向指示器のようなものを与えてくれるからです。これこそが、マルクス主義が世界の多数の人々の間でこれまで発揮してきた、そしてある程度は今でも発揮している強さの源泉なのです。

たとえ、古典的なマルクス主義のかなりの部分が時代遅れになっていることを認めたとしても、現在の社会に関する諸学問 social studies——データの蓄積とアプローチの洗練という点で目覚ましい進歩を遂げていることは疑いないのですが、その一方で専門分化とタ

コッポ化 compartmentalized の進行に悩まされてもいます——は、よりよい選択肢を提示することで人々のニーズにこたえているかということが、大問題として残っています。もし現在の諸学問が人々のニーズにこたえられていないとするならば、「イデオロギーの終焉」を論じるのは、いささか早計にすぎると私には思われますし、少なくとも日本に関してはそうだと思います。

戦前日本のマルクス主義者

思想犯の性格

当時、政治家や支配層の間で、生まれつきあるいは家庭環境のせい、性格が偏向し、ねじ曲がった左傾学生（アカにかぶれた学生）が多数存在するであろうことがしばしば問題とされていました。そこで文部省の学生課が司法省の協力を得て調査を行ったところ、その結果は衝撃的なものでありました〔性格はほとんどの学生が善良か普通で、大学生についていえば、6割以上が善良であった——別紙挿入資料より〕。

左傾学生が生まれる背景としては、貧困——そのような学生は経済的苦境にあえいでいるのだろう——も考えられましたが、これも調査の結果当てはまりませんでした〔大多数の学生の経済状況は普通あるいは富裕で、貧困層は10%台だった——同上別紙資料〕

その結果として、「左傾」学生の多数は、中産階級の「良家」の出身であることがわかり、知性のみならず性格においても「良好な少年たち」であって、異常な要素はほとんど見られないのでありました。

旧制高校生の思想状況

左傾学生の逮捕者数及び起訴件数が最も多かったのは1933年のことでしたが、ラディカルな左翼運動の最盛期は、私が旧制第一高等学校に入学した時（1931年）までには、すでに終わっていました（旧制高校は、全寮制のパブリックスクールのようなところでした〔丸山による欄外書き込み〕）。

それでも「思想問題」の嵐は、依然として旧制高校の内外で吹き荒れていました。私が中学時代に聞いてあこがれていた、寮歌の中で歌われているようなロマンチックな学生生活は、現実からかけ離れた遠い昔のおとぎ話のようでした。

ところで私たちの寮の便所の壁は、そこに書かれた落書きによって昔から有名でした。

しかし最初にお断わりしておきますが、一高創立以来、壁に書かれた絵や文字に卑猥なものは一切ありませんでした。これは一高生徒たちの間にある□□なプライドがそうさせたのです。

その落書きに書かれていた文章は、かつてはカントやニーチェなどの哲学的な書籍からの、あるいはシェークスピアやゲーテなどの文学作品からの引用でありました。しかし、

ある時から新しいパターンが生まれました。といってもいわゆる「エロ・グロ・ナンセンス」的なものではなく、「打倒日本帝国主義!」「中国への軍事的侵略反対!」はては「天皇制廃止のために戦おう!」といったたぐいのスローガンでした。しかし、次に同じ便所に行ったときにそのようなスローガンは消されていて、次のような言葉に書き換えられていました。「アカを向陵から締め出せ」「向陵赤化反対」。こういった落書きは、おそらく様々な運動部の学生によって書かれたものと思われます。

[この部分に配属将校と一言だけ書かれているが、原稿本体に具体的記述はない(本資料10頁)。ただし、後出のメモ部分にある島本中佐のエピソードがこれに当てはまるかと思われる。]

1930年代の初めころ、「思想善導委員会」という組織が文部省内に設立されて、出版などの活動を監督し、反マルクス主義的な文書の出版や配布を行ない、また高名な反マルクス主義の学者をあらゆる大学、旧制高校、旧制中学へ講演に派遣していました。しかし、マルクス主義に対して中立的あるいは無関心な学生は、そのような講演には出席せず、左傾学生は後方の座席から講演者をやじっていました。そのため講演はしばしば、左傾学生と反マルクス主義者の珍妙な直接対決となったのでした。

まじめな青年マルクス主義者

しかしながらその一方で、次のような意味で、私は戦前の左傾した若者の間に広くみられる特徴があったと思うのです。それは「思想犯」として逮捕されたり、有罪判決を受けたりした若者には、学生や知識階級だけでなく、他の社会階級のものも含まれていましたが、そういう若者のたいていは、少なくとも同年代の普通の若者とくらべて、日常生活において、潔癖かつ禁欲的であったということです。

傍証ではありますがこのことを示す一つの資料があります)

「我国思想犯人の環境素質等より見たる犯罪原因」(『司法研究』vol.19)

1929年から1933年の4年間に起訴された1511人の中で、性病に罹患していたものはたった8名でした。このことからこの論文の著者(司法省の役人)は、以下のように断じています。「共産主義者の大多数は未婚の若者であるという事実にもかかわらず、そして彼らのうちの少なからずのものが教育を十分に受けていない労働者や小作人であるにもかかわらず、性病に罹患している事例が極めて少数なのは驚くべきことである。この事実から我々は次のような結論を導くことができよう。すなわち、概してこれら有罪判決を受けた者たちは、私生活において真面目でかつ厳格であったのだ」

「イデオロギー犯」の潔癖な性格を語るのに、性病に関する統計を用いるのは、西洋人の目を見た場合だけでなく、戦後世代の日本人の目から見ても、かなり奇妙なことかもしれません。ですから、この点に関してはいくぶん説明を加える必要があるでしょう。

まず、当時の状況を考慮しなくてはなりません。当時は、通常の男女間の交際の機会が極めて少ない一方、そのような機会を埋め合わせるために花街の興隆があり、若い男性がそのような場所に足を踏み入れることが比較的大目に見られていた時代であったということです。

次に、この報告書を書いた人物は、実は徴兵検査の際の身体検査における性病罹患者の数値を、報告書で述べたイデオロギー犯の数値と比較した結果、このような結論に達したということに注目しなくてはなりません。戦前においては、徴兵検査召集者が身体検査の時に性病にかかっていることが発見されると、検査室にいる多数の召集者の前で厳しく叱責されたものでした。したがって、徴兵検査が終わった直後に、若者たちが集団で花街に駆け込むのは、とくに田舎では珍しいことではありませんでした。ですから、21歳以上の若者全体ともし比較をしてみたとしたら、イデオロギー犯と一般の若者の性病に関するギャップはもっと大きいということになるのです。

日本の伝統的思考対マルクス主義的禁欲

大変逆説的なことでありますが、オーソドキシという理念が世界史のあらゆる場面で科学的思考の発達を阻害してきたにもかかわらず、日本の思想史の文脈においては、外来のオーソドキシという理念が、革命的な役割を果たしました。すなわちオーソドキシという理念が入り込むことによって、世の中には個人的人間関係や集団、コミュニティを超越した、唯一無二の普遍的真理があるのだという信念が初めて日本に植え付けられたからです。そしてこのような信念は、かつての日本においてのみならず、現在でもかなりの程度、民俗宗教としての神道に深く根付いているところの日本の伝統的思考とまったく相容れないのです。

この日本の伝統的思考というのは、どこにおいても見えない霊が活動しており、それらの霊を満足させ、怒らせることのないようにふるまったほうがよいという考えです。一つの原則に従うのではなく、今そこにいる状況について、常に注意深く気を配り、状況次第で行動の仕方を変えることこそ自然なことだとみなされるのです。したがって、なぜ昨日はあのように行動したのに、今日は違う行動をするのかという問題、いいかえると昨日の行動と今日の行動がどのように関連しているのか、という問題には、ほとんど注意が払われないのです。

さて、このような歴史的な文脈を鑑みると、江戸時代初期および明治初期のキリスト教と1920年代30年代のマルクス主義とが、急速に拡大し厳しく弾圧されたという点ばかりでなく、個人の性格や行動様式への影響、新しい思想をどん欲に求める情熱、潔癖な生活様式の実践などの点においても、きわめて似通った特徴を持っているという驚くべき事実にたどり着くのです。

日本におけるマルクス主義の著作の出版

多くの著作が出版されていた戦前日本

日本は、戦前においても、マルクス主義関連の著作（非マルクス主義者あるいは反マルクス主義者による研究書も含む）が非共産主義世界の中で最も多く出版されていることで有名でした。このことは、党員数ばかりでなく、その組織的な影響力の点からみても、日本共産党の党勢が極端に小さいという事実と比べて驚くべき対照をなしていることを示しています。

とりわけ顕著なことには、1920年代初期から30年代初期にかけて、膨大な量のマルクス主義文献の翻訳がなされたことです。西欧（特にドイツ）やロシアの二流の共産主義者やイデオログのとりにも足りない論説まで、多くの伏せ字を伴いながら次から次へと翻訳されたのです。これらの翻訳は概して粗悪なうえに、今度はそれが中国へ流出して日本語から中国語に翻訳されるという事態に相成りました。[このあとにつづけて、メモ1枚が挿入されているが、内容がかなり断片的であるため、割愛した（本資料19頁）。]

もちろんこのような通俗化したマルクス主義の紹介だけが当時の話のすべてだったわけではありません

『マルクス・エンゲルス全集』という金字塔

マルクス主義の古典の翻訳と並行して、高水準の著作の出版も行われました。古典の翻訳の中で最大級の試みは、改造社の『マルクス・エンゲルス全集』の翻訳です。それは31巻本であり、1928年から5年かけて1932年に完成しました。当時において、ソ連を含めて世界的に見ても最も包括的なマルクス・エンゲルスの全集でありました。もちろんそこには書簡も含まれています。ドイツにおいてさえ収集するのが困難であるような文書を得るために、ありとあらゆる努力がなされました。例えば *Neue Rheinische Zeitung* のバックナンバー（1848-49）、*Vorwärts*（1869-76）、*Züricher Sozialdemokrat*（1879-90）、*Vork-sstaat*（1869-76）、1860年版の『新アメリカン百科事典』などで、そしてもちろん *Die neue Zeit*（1883-1923）も入っています。

翻訳者は98人に及んでおり、その中には、著名なマルクス主義研究者だけでなく、東大の蠟山〔政道〕教授、東北大の新明〔正道〕教授、中川〔善之助〕教授のような非マルクス主義の学者も加わっていました。

最初の計画では全集の巻数は20巻とされていましたが、出版が進むにつれて、新しい原稿が見つかって加えられたりしたので、最終的には31巻になりました。ただしその中には『資本論』は入っていません。『資本論』の翻訳は、すでに高島素之によって完成しており、1924年に出版されていたのです（カウツキー版による）。さらに注目すべきは、全集の出版

冊数です(巻によって数は異なりますが)。第1巻は、15万冊売れました。1巻当たりの平均でいうと12万冊です。編者によると、読者の70パーセントは大学生及び旧制高校の学生であったそうです。

ここで一つのエピソードをご紹介します。編者の一人である大森義太郎(東京帝国大学経済学部元教授、3.15事件の後ポストを追われた)が、当時モスクワで研究をしていたのですが、そこでブハーリンに日本人読者のための推薦文を書いてもらったというのです。

さてこの大森教授ですが、向坂逸郎(九大)や石浜知行(九大)両教授と合わせて、1928年の3.15事件によって大学の職を追われた後も、労農派の一斉検挙までは、政治経済問題に対する評論家としてクオリティ・ジャーナリズムの分野で刮目すべき人物であり続けました。そして、労農派事件まで大学の職にとどまっていた東大の有沢教授を加えて、ある風刺家によって、「マルクス4兄弟」と当時呼ばれたのです。申し訳ありませんが、私はこの4人のうち誰がグルーチョ・マルクスにあたるのかはよく存じません。[ここで丸山は米国のコメディアン一家のマルクス兄弟に喩えて、上記4人のうち誰が長男のグルーチョに当たるのかは知らないとジョークをとばしている]。

『共産党宣言』の翻訳をめぐる状況

けれども、改めて注目しなければいけないことは、非マルクス主義者はいうまでもなく、この翻訳作業に従事した大多数のマルクス主義学者も、日本共産党と密接な関係ではなかったということです。むしろ、彼らのうちの多くは、先に私がふれたように、正統派の共産主義者から常に激しい攻撃対象となっていた労農派に属していた(あるいはそうみなされていた)のです。

さらに、奇妙なことには、事情はよくわかるのですが、『共産党宣言』は、この全集からは除外されていました。

『共産党宣言』が初めて翻訳されたのは1904年のことで、『平民新聞』の発刊1周年記念にあたる第53号に、幸徳秋水と堺利彦が英語版から訳したものが掲載されました。けれどもこの翻訳は桂内閣によって即座に弾圧されました。幸徳、堺、西川は、出版法違反で起訴されました。『共産党宣言』の全訳(前の翻訳では省略されていた第3章を含む)が出版されたのは、その3年後の1907年、『社会主義研究』という月刊誌においてでありました。この雑誌が出版を許されたのは、一つには西園寺内閣の比較的自主主義的な政策のためであり、またこの雑誌の学術的な性格のためでした。

いずれにしても、幸徳事件[大逆事件、1910年]が起こる前に、『共産党宣言』が日の目を見ることができていたのは、驚くべきことでありました。なぜなら、『マルクス・エンゲルス全集』が出版された昭和初期(1928年から32年)においてさえ『共産党宣言』は全集

からは慎重に排除され、ときに訳語の選択においても、ブルジョアジーをわざわざ「紳士閣」と訳すように、奇異と思われるほどに神経を使っていたからです。

弾圧下における書籍の入手

マルクス・エンゲルスの古典的な著作は、とりわけ岩波文庫のような文庫本によって幅広く普及していたのですが、それらが発売禁止になったのは、1937年末に労農派グループの主要なメンバーが逮捕された後でした（1937年7月には盧溝橋事件が起こった）。

けれども、その後においても、その手の本は、もし書店となじみでかつそれなりのお金を払う用意があれば、本郷あるいは神田の古本屋でときには手に入れることもできたのです。

私は、ちょうど1937年くらいに古本屋で5円払って『共産党宣言』のドイツ語版（Marxistische Bibliothek）を買った時のことを覚えています。店の主人は店の奥からその本をもってきて、尋常ならざる用心深さで周りを見渡してから、私にそれを手渡しました。当時は、警察官が抜き打ちで本屋にやってきて、「政府転覆を教唆する」ような書籍が本棚にないかチェックしていたのです。この店の主人は、かつて、どうやって警察官をうまく出し抜いたかについて私に語ったことがあります。本を本来あるべき場所とは違うところにおいて警察官の目をごまかしたというのです。

その本は、レーニンの『左翼小児病』で、主人はその本に白い紙のカバーをかけて背表紙に『小児病』と題名を書き、医学書の場所に置いたのです。その結果本は命運を保ち、めでたく売れたということでした。

〔このあとにつづけて、『日本資本主義発達史講座』、講座派と労農派の特徴に関するメモが1枚挿入されているが、内容がかなり断片的であるため、割愛した（本資料27頁）。〕

転向問題

転向の始まり

1933年は、ヒトラーがドイツで政権を奪取し、アメリカでフランクリン・ルーズヴェルトが大統領に就任したという意味で世界史の転換点でありました。しかし、この年は日本のマルクス主義思想及び運動の歴史におけるエポックメイキングな年でもありました。1933年6月いわゆる転向声明というものが出されたのです。当時獄中にあった、日本共産党の主導的な人物〔日本共産党中央委員〕佐野学と鍋山貞親による「転向」宣言です。この声明は、そのあと巨大な雪崩を打つように続いていく「転向」のまさしく始まりでありました。

転向の動機の内訳

〔本項は、別紙資料として挿入されている図表部分を記者が要約して文章化したもので

ある]

転向の動機であります。1934年3月の司法省行刑局の統計によりますと、ここで取り上げられている転向者446名のうち、家族関係から転向したものが203名（半数ちかく）、国民的自覚によるもの90名（残りの3分の1強）、拘禁生活による後悔49名、理論的清算によるもの46名、宗教上の理由（キリスト教、仏教双方を含む）からのもの45名、性格健康等の個人的理由からのもの33名、その他20名となっています。また1942年10月の「思想犯保護対象者ニ関スル諸調査」『司法保護史料』第33輯（1943年刊）によりますと、対象者2403名（より広範囲にわたる年月における転向者を対象にしている）のうち、家族関係が677名、国民的自覚が768名（両者合わせた1445名は過半数を越えている）、拘禁生活と理論的清算が299名ずつ、宗教上の理由が52名、個人的理由が232名、その他76名となっています。なお、これらの解答は複数回答であることを注記しておきます。

日本的伝統に敗れたマルクス主義

さて、これらの断片的な数字からも、私たちは日本の「思想問題」の特徴を映し出すいくつかの興味深い点を見ることができます。第一に、これらの時期の全体を通じて、家族関係と国民的自覚、より正確に言えば国民的自覚の再確認というものが、共産主義からの転向において主要な要因となっていたことです。第二に、刑務所には教誨師（たいていは僧侶）の制度があり、刑務官も宗教書を読むことを推奨していたにもかかわらず、宗教は「思想」囚の転向にあたってあまり大きな役割を果たしていません（とりわけ1942年のデータでは）。このことは、戦前の日本においては、通常であれば宗教が担っているような機能が、国家や家族に向けられている共同体的感情に代替されてしまっていることを、あらためて示しているように思われます。

要するに、日本における知的勢力としてのマルクス主義の栄光と悲劇は、普遍的な真理とみなされるものへの全面的な献身によって、この（国家や家族への）特殊主義的な忠誠心という恐ろしく頑強な伝統に正面から挑戦しようとしたことから生まれたといえるのです。

実際、戦前の日本の共産主義運動（労農派マルクス主義者も含めて）は、伝統的なシンボルやナショナリスティックなシンボルに完全に背を向けたという点で、アジアの（共産主義）運動の中で特異な位置を占めてきました。したがって日本の共産主義運動主義者たちは、マルクス-レーニン主義の原則にかたくなに固執し続け、理論を実践に移していくとき、日本の具体的な諸事情を考慮するというような、プラグマティックなアプローチがほとんど頭に浮かんでこなかったのです。学問的なマルクス主義研究の極めて解釈学的あるいは訓詁学的な性格は、このような状況の反映ともいえるのです。

ここには悪循環がありました。まさに伝統的なシンボルやナショナリスティックな感情

というものが、支配階級によって完全に制度化されてしまっていたために、共産主義者やマルクス主義知識人たちは愛国、愛国心といった言葉さえ全面的な侮蔑の対象とみなしてしまったのです。

そして、その結果として彼らはますます国民の大多数から孤立したのです。

この意味で、[1930年代半ば以降] 地滑り的な転向現象が起こってしまったのは、「アカ」に向けられたあらゆる物理的強制力を考慮に入れたとしても、それだけが原因とは言えず、1931年以降の伝統主義・ナショナリズムの潮流の勃興が、大多数の「アカ」の思考においてもっとも無防備だった部分に対してきわめて効果的に攻撃を加えたからだといえるのではないのでしょうか。

メモ部分

戦後日本のマルクス主義をめぐる状況に関するメモ

[以下 8 ページにわたって、断片的なメモが挿入されている。]

大まかに整理すると

i) 学問の世界における社会科学としてのマルクス主義の衰退

①歴史派経済学から数理経済学へ

②哲学の問題

a) アメリカ社会学の影響

b) 政治学における変化、政治過程論と行動科学のアプローチの登場

戦前の国家学 Staatslehre からの解放

→ 政治的多元主義 (ラスキ&コール) 受容

c) 哲学における実存主義とプラグマティズムの台頭、言語哲学、論理実証主義、□□

・システム全体の理解というよりも、方法論、視角、観察に基づく仮説の厳密性が優先される

・要は、社会の分析方法が、社会科学の多数のフィールドに拡散してしまったということ

ii) 正統派スターリン主義の崩壊の衝撃

・マルクス・レーニン主義とは何かという解釈の多様化

・政権レヴェルにおける□□

・複数のマルクス主義の登場

iii) マルクス主義者であることと政治的立場の関係をどう見るか

・マルクス主義の立場に立つ教授が、社会問題への対処についてリベラルな立場の同僚

より保守的であることはありうる。例：大学紀要における論文の内容、ストックホルムアピールへの署名問題

- ・自身の著作が、マルクス主義者によって、西洋かぶれであるとか、退廃的であるとか、ブルジョア的であるとか、帝国主義的だとまで批判されている社会学者の方が、マルクス主義者より、政治的な見解において、よりラディカルだということもある。

[戦後日本のマルクス主義に関しては、以上のような筋立てで話をする予定であったと思われる。]

1920年代および30年代の出来事に関する年代記的メモ

(1)

- ・1923年の関東大震災、朝鮮人に対する暴行、大杉栄の暗殺…プロレタリアイデオロギーとプロレタリア運動の転換点に、思想問題、思想犯、思想検挙等、思想弾圧の激化
- ・1926年若槻内閣誕生、労農党・社民党創立
- ・1928年第一回普選、3月15日労農党評議会解散命令、特高設立
- ・1929年山宣 [山本宣治] 暗殺

(2)

- ・1931年一高入学、すでにラディカルな運動は衰退していたなどの記述
- ・思想犯検挙者数起訴者数、階層、戦後との比較の困難さなどについてのメモ
- ・戦前のラディカルの特徴→幹部クラスの共産主義者やリーダーだけでなくそれ以外の多くの若者が「思想問題」で逮捕された

※16世紀末・17世紀初期、あるいは明治初期のキリスト教徒との比較

「共産主義者に比べれば社会主義者のほうがまだましだ」

- ・戦後左翼との比較、優秀な者とそうでない者、まじめなものと軽いかかわりのもの、外向的、实际的、行動志向、私生活重視

とはいっても、戦前のラディカルと戦後左翼の間には、より裕福な家庭出身の学生が戦後増えたという点以外では、知的レベル、個人の性格、行動様式などにおいて有意な差はみられない。

- ・思想善導委員会
- ・配属将校島本中佐

「君たちが財閥を批判するのは大いに結構。彼らには批判されるだけの理由がある。しかし、君たちの中に「国体」や天皇制に疑問を持つ者がいるのはなぜなのか、なぜ君たちは満州の現状に無関心でいられるのか」。そして彼は満州のおおざっぱな地図を描いて、次のように言った。「もし日本軍が満州に駐屯していなかったとしたらど

うなるだろうか」。続いて彼は地図をチョークで真っ赤に塗った。学校が夏休みのようなモラトリアム的な時期でいられる時代はもう終わったのだという彼は、さながら予言者のようにもっともらしく見えたのであった。

・1933年佐野・鍋山転向、『日本資本主義発達史講座』刊行

・1934年東京帝国大学入学

この一年前に滝川事件が起こった。これは戦前における最後の大規模な学生運動だといえる。それ以後、大学内の雰囲気は完全に変わってしまった。学外での国粋主義的な嵐が吹き荒れるのに比例して、大学全体の雰囲気は、よりおとなしく、また象牙の塔に閉じこもるようになってしまった。

・1935年天皇機関説問題の炎上

「自由主義は共産主義の温床」という言説広まる。

・1936年二・二六事件、日比谷公会堂において、軍部及び民間右翼主催の「東京帝大法経学部打倒大演説会」開催

東京帝国大学、とりわけ法学部と経済学部は極右集団からの集中砲火の標的となった。ある時、右翼の一団が、法学部長の辞任勧告書を手渡すために大学に乱入したことがある。彼らはすぐに怒れる学生によって取り囲まれた。けれども、その日の午後の授業が中止になった以外は、取り立てて騒ぎは起きなかった。私が見る限りでは、この「暗黒時代」を通じて、学生の右翼集団の活動に対する反応は冷めたもので、積極的に立ち向かおうとするものではなかった。

・1937年卒業、日本経済史研究会、労農派一斉検挙、人民戦線事件、日本無産党解散

・1938年、教授グループ事件、古本屋の話、転向の段階、

・戦後、学問世界におけるマルクス主義の復活、マルクス主義学者の相対的減少

学問的ディシプリンとしてのマルクス主義と政治的立場としてのマルクス主義の乖離 [このあとにつづけて、治安維持法を説明する英文原稿があるが、これは用語解説のための補足的なものであると判断して割愛した（本資料39-40頁）。]

戦後日本の左翼運動の特色

共産主義者と社会主義者の近親憎悪

社会民主主義政党の多くが共産党から分裂し、もしくはそれに対抗して生まれたこと[この一文は本項の冒頭部分に日本語で書かれている]。

このような背景があることから二つの問題が生まれました。第一の問題は、1920年代後半以降の社会民主主義運動（労働組合運動も含む）の多くの指導者たち（安部磯雄、河上丈太郎といったわずかな例外をのぞいて）は、かつては共産主義運動に自分自身かかわっていたか、あるいは少なくとも密接な関係を持っていたために、また主要な社会主義政党

(例えば再建後の労農党、全国労農大衆党、社会民衆党、のち社会大衆党)および労働組合の連合体(例えば総同盟[日本労働総同盟]、全評[日本労働組合全国評議会])の合法的活動が、日本共産党の結成以前ではなくそれ以後に、共産党からの分裂(あるいは、1925年の総同盟や[1930]年の全協[日本労働組合全国協議会]の場合のように共産党の直接影響下におかれた団体からの分裂)の結果として始まったために起こったものです。それは、それらの活動の指導者及びその補佐役たちが、正統派の共産主義者に比べて自分たちが影の薄い存在だという感覚を持っていたようにみえるということです。そして、彼らはその感覚を、共産主義者がほぼ完全に弾圧されて表舞台から姿を消したのちも、永らく持ち続けていました。他方、そのような劣等感、彼らが共産主義者から裏切り者とか「分派主義者」といった非難を絶え間なく浴びせられただけに、ますます強く共産主義者に対する根強い憎しみや敵意を生み出すことになりました。

こうした劣等感、共産主義者に対する恐怖心や憎しみとないまぜにされて、戦争が終わっても続いたのでした。いや降伏直後の数年間に関していえば、むしろ強化されたといっていいいでしょう。というのは、戦前の多くの社会主義者の指導者たちが、例えば社会大衆党を自主的に解党したり、ナチスの労働戦線の日本版ともいうべき産業報国会の設立に積極的な役割を果たしたりという具合に、いろいろな形で戦争協力を行ったという事実がありました。その一方で、共産主義者とりわけ戦後共産党の再建に尽力した者たちは、獄中であってはいかなる「転向」の誘惑にも屈せず、また市中においては最後まで反戦の宣伝活動を続けていました。ですから、どちらが勇気ある人たちだったかは、戦後一目瞭然になってしまったからです。

こうした社会主義者の劣等感はいまでも幾分か残っていますが、明らかに弱まっています。一つには世代交代もありますが、また社会主義者たちが自信を持ち始めたからでもあります。あるいはむしろ彼らが、労働組合だけでなく大衆的な示威運動を指導する面で、共産主義者と競合することにおいて前ほど恐怖心を感じなくなったためともいえるでしょう。まさに1960年5月から6月にかけての安保闘争がそうだったのです。

(湯浅成大訳)